早来北進産業廃棄物最終処分場建設の問題について考える　10回目

「あびら環境フォーラム」に学ぶ（中）「上流から下流へ流れる」と考えると…

安平町で事業者が計画している産業廃棄物最終処分場問題をテーマに「あびら環境フォーラム」（安平町主催）が９月10日に町内で開かれた。今号は、リスクのある物質は、川の上流から下流へと流れていくということがテーマ。

■遠い所で起きること？

日本の環境基本法には、環境に関する人々の権利はのっていないと、東京経済大学の礒野弥生名誉教授はフォーラムで語った。

「権利がのっていないということが、非常に大きなネックになっています。この環境権というのを環境基本法の中で実現したい、というのが環境法制に関わるすべての人たちの願いです」と強調した。

環境権がないということを背景に、産業廃棄物関連施設は、ともすれば脆弱な地域に押し付けられがちになり、そうした地域にはいくつもできる、ということになりかねないのだという。「脆弱」というのは、例えば人口が減少している地域やあまり反対が起きない地域、経済的に立ち行かなくなっている地域などが「狙われやすい」。

礒野氏は「人口密集地から遠い場所、遠隔地に立地されやすく、生産とは関係のない地域に押し付けられるということが起きてきます。そういう地域に、押し付けて良いのかという問題を考える必要がある」と指摘。

遠隔地に立地することで、住民の日常的な関心が薄れ、さらに処分場の下流地域で、さまざまな問題が起きる可能性があっても関心が持たれにくいという問題などが考えられるとした。また、日本の法律上、事業者から出される情報が「事業者側が住民を説得するための情報」になってしまっており、それを踏まえた上で、住民にとって必要な情報をいかに取得し、共有していけるか―ということについての重要性を述べた。

廃棄物処理問題に知見の深い安平町環境保全アドバイザーの藤原寿和氏は、最終処分場に埋め立てられるごみから、さまざまな有害物質が出ることを説明。これらの物質が漏れ出す時は「上流から下流に流れているのが実態で、埋め立てて『最終処分』ではない。本来、長期的なリスク管理をしていかねばならない」と述べた。安平町で事業者が計画する産廃最終処分場について、安平川水系（苫小牧・勇払川と合流し海へと出る）であり「森、里、川、海がつながっている。広い意味で、一人ひとりが考えていかねばならない」と、立地する安平町だけの問題にとどまらないことを指摘した。

■運動がもたらすもの

上智大学地球環境学研究科の織朱實教授は、こうした問題に対峙する際、関心がある人、そうでない人も含めて、どうしたら地域全体で考えていけるのかを示した。

織氏は「どうしても『法律的には、どのような武器が使えるのか』と法的、技術的問題が論点になっていく。こうした反対運動等では、その結果として勝った、負けたということでは終わらない大きな傷が残っていく」と指摘。

運動している人、静観している人が同じように考えていけない環境では、どうしても対立構造が残ってしまうという。それをしないためには「守っていかなければならないこの地域の宝というのが何か？立地することで失われるものは何かということを、市民全体で共有していかなければ、次のステップには続いていかない」と説明。「現在は、一通過点であり、この運動がもたらすものは何か？という視点から、多くの方を巻き込み、共に考えていくということが大切」だと述べた。

「紙の街の小さな新聞　ひらく」　2022年11月号より

町公式YouTubeで「あびら環境フォーラム」を模様をご覧いただけます。右記二次元バーコードからアクセスしてください。

この記事に関する問合せ　税務住民課住民生活グループ　☎㉒2940